EDGE
Extraordinary Dyslexic Gifted Eclectic

Report from the EDGE

Vol.16
2008.2.25

ディスレクシア (Dyslexia) とは……
知的に問題がなく、聴覚、視覚の知覚的機能は正常なのに、
読み書きに関して特徴のあるつまずきや学習の困難を示す症状のことをいいます。
EDGE は……
ディスレクシアの正しい認識の普及と教育的な支援を目的とした特定非営利活動法人 (NPO) として、
2001 年 10 月に認証・設立され、活動しています。

日本 LD 学会第16回大会について

クリニック・かとう
加 藤 醇 子

2007年11月23日・24日・25日に横浜の開港記念会館、関内ホール、情報ホールを使って、日本LD学会第16回大会と第15回教育研修会を開催しました。「ディスレクシアを主体に ― 特異的LDへの気づきと支援」を大会のテーマとしました。特別講演は、ボストンのタフツ大学読字言語センター長マリアン・ウルフ教授による読みの脳科学の進歩についての講演とディスレクシア専門の私立校ランドマークスクール校長カーン氏による教育システムや支援の実際についての講演でした。

教育講演は、ディスレクシア２、書字障害、算数障害、言語の脳科学、新しいLDの判定、デイジーソフトの利用各１でした。ディスレクシア本人によるトークセッションも好評でした。そのうちのお一人がジャズドラム奏者の長田氏で、懇親会の演奏も引き受けて頂き、素晴らしいリズムでした。夜空に轟くドラムが、ディスレクシア支援の幕明けのように感じられました。大会シンポジウムも日本のディスレクシアについてでした。ウルフ教授やカーン校長にもアドバイスを頂きました。他には神奈川県内の教育機関、療育機関、民間機関などのエクスカーション（見学と小講演）を企画しました。

２日間で2,110名の参加があり、３日目の教育研修会には713名が参加しました。予想も出来ない人数の参加で、会場は大混乱でした。事前参加登録については業者の選択を誤り、かなりの方々にご迷惑をかけ、プログラムや論文集の間違いもあり、大きな大会運営の難しさも知りました。エッジ代表の藤堂さんはシンポジストや特別講演の通訳に大活躍し、マッケンジー・ソープさんの絵が大会プログラム

いよいよ3月刊行
ディスレクシア
読み書きのLD
親と専門家のためのガイド

マーガレット・J・スノウリング 著
加藤醇子・宇野 彰 監訳
紅葉誠一 訳
A5判並製368頁位 本体予価4200円(税別)
ISBN:978-4-487-79725-7

東京書籍
書籍営業部
電話 03-5390-7531

日本のすべての発達障害関係者が
学問的基礎からしっかりと理解し、
確かな支援につなげるための
基本中の基本図書ここに登場!
基礎知識から克服への支援法、
教育までを包括的に紐解く必読書。

第１章　ディスレクシアとは
第２章　ディスレクシアの定義
第３章　音韻表象仮説　第4章　読みと綴りの学習
第５章　ディスレクシアー書き言葉の障害
第６章　ディスレクシアの個人差
第７章　音韻障害の重さの程度による仮説
第８章　ディスレクシアの生物学的基盤
第９章　ディスレクシアは感覚障害か
第10章　ディスレクシア克服のための支援法
第11章　習熟と不完全さー補償的教育の役割
第12章　まとめならびに今後の見通し

や論文集、講演集DVDの表紙を飾りました。エッジのご支援有難うございました。

藤堂さんコメント

LD学会超満員の会場を見て隔世の感を抱いたのは私だけではなかった。「ディスレクシア」を知ってほしい！そんな思いで活動をはじめ、NPOを立ち上げ今日まで歩んできたことが無駄ではなかったと実感できた。

やっとLD学会も「ディスレクシア」を柱にしてという流れが出来てきたので今度はこの流れが止まらないよう、良い方向へ進むようこれからも力を抜くことなく継続していかなくてはと思いを新たにした。

願わくは自主シンポやポスター発表などもディスレクシアへの取り組みを前面に出したものが主流になることを願っている。

どうしても教育や福祉、就労の現場では社会性や行動の問題への対応が優先されがちであるが小さいときから読み書きがなかなかはかどらないことによる幾多の問題へも真摯に取り組んでほしいと願っている。

ディスレクシア協会名古屋のこと

代表　彩子　E. High

ディスレクシア協会名古屋は1996年に発足したもので、以来12年がすぎました。まだディスレクシアという言葉も日本ではまったく理解されなかった時代、パトリース金田という小学校の特殊教育に携わっていたアメリカ人の女性が、日本の5つの都市で開催したディスレクシアに関するワークショップに出席した者達に、「あなたたちが名古屋の会を作ってください」という彼女の呼びかけに呼応したものです。「協会」という名称は、アダム・バンクスという英国人が、本部を広島に置き、ディスレクシアの診断や、電話相談、学習指導、機関紙発行などを、全国規模で行おうという大きな構想の下に発足させたものだったからです。返す返すも残念なことにバンクスは次の年、喘息の発作のために急死してしまいました。その後、広島の本部は優れた会報を6号まで発行しましたが、自然消滅のかたちとなり、名古屋だけが残りました。

名古屋の会は、フィリパ・ゴーターというニュージーランド人の女性と、私、彩子・ハーイが中心になり、ディスレクシアとADHDを持つ子供たちの親と、塾の経営者たちからなる10人ほどの会で、外国からの情報を勉強する例会と、外国からの講師や、日本人のオプトメトリストによる講演会を主催するなどの活動を続けていました。次第に日本国内の状況も動き始める中、LDの支援をする飛翔の会が学校を発足させたと記憶しております。

名古屋の会には、それほどのエネルギーを集中できる人間がいませんでした。フィリパさんは、お子さんの中学校入学に際して、ニュージーランドへもどり、発足当時の会員は、西崎教江さんと私だけになりました。西崎さんは、会計や記録、連絡など、会の運営全てを引き受けて支えて下さいました。2001年頃、杉村さんと、吉田さんの参加があり、彼女たちはディスレクシアの会を所属基盤として、自分たちの行動範囲を積極的に拡大してゆきました。杉村さんは電話相談の名手で、かつ東京の発達心理の宮尾益知先生とのルートを確立し、何人もの方達がお世話になりました。吉田さんはウィスコンシンの池田実先生をお招きしてサマースクールを開催。今春からは大学院で教育学を専攻します。会員の皆様はそれぞれお子さんと真剣に向き合い、難しい時期を乗り越えようとしています。私は定年になるのを機に、この春、主人と二人、マレーシアに移住します。会の実際の活動はすでに、スムーズに次の方たちに引き継がれています。現在は旧本陣小学校に本部を置き、情報交換をはじめ、算数の指導や、中高生が中心の作文教室がにぎやかに行われています。

今後の日本の将来を担う大事な機能としてのエッジの発展を、切にお祈り申し上げます。ディスレクシア協会名古屋も小さいですけれども、熱い心で、同じ目的のために協力できれば幸いと存じております。

平成19年度事業報告　特定非営利活動法人エッジ

2007年はエッジにとってもディスレクシア全般にとっても基礎固めと核となる事業の始動の年でした。

ディスレクシアを取り巻く環境

発達障害者支援法が始動して福祉、教育や就労の分野で都心では発達障害全般に対する理解が進み、色々な政策の予算措置がとられ4月から始められることとなりました。

その中には特別支援教育が日本全国の小中学校で行われることや、教育支援員制度、就労の際のサポートなどが柱となっています。ただ、上記の法律の定義では「発達障害者」はこれまで法律で対応されてきていない自閉症、ADHDやLDなどの生まれつき持っている障害と言うくくりであり、医学上の定義とは違っているため用語の混乱があります。また、各現場では行動上や社会性の問題への対応が優先され、ディスレクシアを含むLD（学習障害）への対応はまたしても遅れています。

読み書きやリテラシーの困難さを持つ人達への対応が必要であることもその反面クローズアップされてきています。LD学会でもメインテーマは２年続けてディスレクシアでした。また、読みが困難な人達には福音であるDAISYプログラムを使った対応に関しても2007年から２年続けてディスレクシアキャンペーンが繰り広げられています。

NPO法人エッジの2007年

充実した年でした。啓発はキャンペーンを通しての活動と各種講座などへの講師派遣の依頼が多くありました。ネットワークを通しての啓発も意味がありました。港区との協働では教育委員会とも連携がスムーズに取れるようになり、支援も入り方もだいぶ整ってきました。また、助成金を得てこれまでの育成講座の内容をテキスト化することや講座修了者のフォローアップなどに力を注ぎ、港区モデルの効果測定法の提案も手がける事が出来ました。

当事者の会であるDX会から派生してインターネットラジオによる発信も開始しました。本年度始めた「ディスレクシア塾」でも多くの成果が上がっています。

このようにエッジの三本の柱である「啓発」「サポート」「ネットワーク」が全てのディスレクシアの人のためにと言う大きな目的へ向ってかみ合って動き始めた年でした。

平成１９年度決算報告

収入の部	
会費入会金収入	541,000
事業収入	4,284,780
その他収入	60,971,616
当期収入合計	65,797,396
支出の部	
事業費	57,437,764
管理費	9,627,667
当期支出合計	67,065,431
当期収支差額	−1,268,035
前期繰越収支差額	2,398,778
次期繰越収支差額	1,130,743

平成20年度事業計画　特定非営利活動法人エッジ

NPO法人エッジは活動９年目を迎えます。試練もいろいろとありますが着実に本来の目的であるディスレクシアの啓発とサポートへ向かって歩を進めています。昨年度全国的に開始された特別支援教育とそれを支える発達障害者支援法は私たちの活動にとって力強い追い風です。港区と協働で行っている特別支援教育の事業：個別支援室に関連する事業もその一つです。しかし、発達障害と言う名のもとにひとくくりにされ、ディスレクシアが埋もれてしまっている状況もみられています。

平成20（2008）年度は上記のような状況を踏まえて、ディスレクシアの存在を広く一般に啓発するともにサポート現場で得た経験と知識を伝えることに力を入れる所存です。

ディスクレシア塾の教え方 英語

フォニックスで楽しく発音を身につけて、英語を学ぼう

岩崎　ゆり子

私のクラスでは、「フォニックス」を使った英語のクラスを実施しています。フォニックスとは直訳すれば、「音声学」で、簡単に言えば英語の発音と文字の関係のルールです。皆様が、子供のころ日本語の文字（ひらがな・カタカナ）とその音を頭の中にある「言葉」と結び付けていったのと同様に、英語の言葉を音と文字を組み合わせることで学ぶことができます。つまり、フォニックスを通して、ネイティブの子供たちのように、「英単語を読む・書く」ということが身に付きます。

実際のクラスでは、最初にアルファベットを学び、次にイラストが描いてあるカードを使って、イラストの英語の単語を学びます。その際に最初は、主な子音とその文字と正しい発音、次に母音とその文字と正しい発音を学習します。

つまり、基本的に以下のような手順で、勉強していきます。

（なお、 c と t は日本語の最後の母音部分は取った音にしてください）

c ：発音は「ク」
t ：発音は「トゥッ」
u ：発音は「ア」
a ：発音は「ェア」（に近い音、エとアの中間の音です）

上記を知った上で単語を読むと

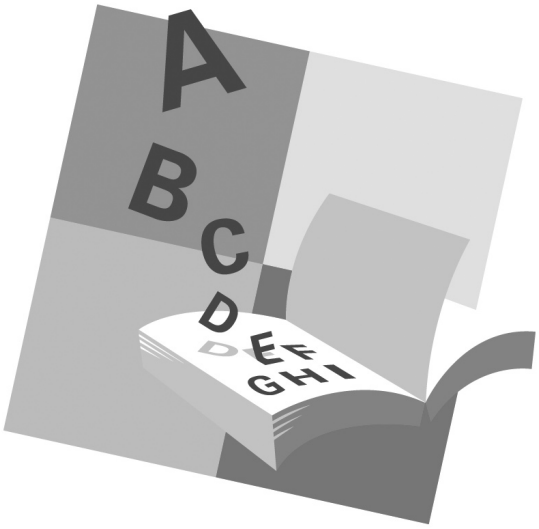
cut は、「クアットゥッ」と発音できますし、cat は「キャットゥッ」と発音できます。これを続けていれば、octopus というような長め単語も「オクゥットゥッパス」と正しく読めるようになります。

最近では、st、sn、cl などの 2 音以上混合したものや sh、th、ch などの二つの文字を組み合わせた子音や、ee、oo など二つの母音を組み合わせた音を学びました。今後は、たとえば上記の cut に e を付けて cute にした場合の音の変化についてなど学習していきます。つまり、単語の最後に e を付けることで（マジック e と名づけています）変わってくる発音の仕組みです。

このクラスでは、カードなどを使って遊びを取り入れています。新年に入ってから今までの復習を兼ねて、神経衰弱に似たゲームを実施しました。絵カードを正しく読んでから絵カードをめくるというルールにしました。100 ワード以上あり、単語数の多さに学習してきたことを改めて、感じてとてもうれしかったです。飽きないで楽しくこのような音と文字のルールを今後も子供たちに学んでもらおうと考えています。

使用テキスト

「英語となかよし」
　　フォニックス英語研究会　開拓社刊
その他　カードブック指導書有り



ENGLISH

ディスレクシア塾これまでの活動報告

ディスレクシア塾　事務スタッフ　北 河・木 村

当塾は昨年４月に開講し、現在小学生９名、中学生６名が受講しています。児童生徒ひとりひとりの特性を活かし、ラーニングスタイルに合った学習のスキルを身につけられるよう、プログラムを組み、個別の対応をしています。

算数・数学は数の概念を理解しやすいツールとして知られているソロバンを用いて授業を進めています。ソロバンを通してクラスの皆がコミュニケーションをとることで、楽しみながら学習できるよう工夫しています。

国語は少人数のグループに分かれ授業を行なっています。小学校低学年はマインドマップを使用し作文力養成と、漢字カルタを使用しての漢字力養成。高学年は今後どの学年になっても長く活かせるように、ことわざや四字熟語のカルタと、タッチタイピングの練習を行なっています。中学生はひとりひとりのニーズに合わせて漢字、マインドマップ、タッチタイピングなどを使用して少人数のグループで学習しています。

英語はフォニックスという学習法を使用して授業を行なっています。フォニックスとは、英語の音を各アルファベット及び、アルファベットの組み合わせで細かく学び、この音を学ぶことによって、単語が正確に発音でき、読めるようになるといったものです。

子どもたちは、毎回この塾を楽しみに通っており、出席率はほぼ100％！学校とは違ったスタイルで授業を行なうことによって、子どもたちのやる気をうまく引き出し、前向きに取り組めています。また、子どもたちにとって、心地よい居場所ともなっているようです。

第15回DX会報告

柴田章弘

平成19年12月22日（土）、第15回DX会は14人（男７名、女７名、当事者11名、支援者３名）の出席で、個別支援室の隣、地域活動室で行われました。今回から、題を決め、参加者に自分の意見を話してもらう形式にしました。「周囲に自分の困難を告知するべきか、隠すべきか」という題でした。予想通り、「知らせるべき」派と「隠すべき」派の二つに分かれました。周囲の状況に応じて、「知らせて良い場合」と「隠す場合」が出てきます。ディスレクシア当事者の皆さんはそのジレンマに苦労してきたことです。

イギリスではディスレクシアは一般的で、自ら名乗り出ても、なんら問題はありません。ロンドンから帰国していた男性会員は堂々と「知らせるべき」派でした。日本でも発達障害の傾向のある人々が多い職場なら、理解は得られやすいようです。しかし、全般的にはやはりカミングアウトは「時、人、場所」を選んで、よほど良いタイミングでしないと不当に扱われ、職場で差別といじめの対象になりかねません。当事者が声を上げ、周囲を啓発することが大切なようです。それこそ、DX会の使命ではないでしょうか。なお、当日の状況はブログのカテゴリー『インターネットラジオ』でお聴きになれます。

インターネットラジオのアドレス　http://edge-radio.fmmbc.com/

「大学における学習障害へのICTを含む支援に向けて」の講演会について

広瀬洋子（NIME研究開発部教授）

メディア教育開発センター（NIME）では過去6年間15回にわたり、高等教育における障害者支援に関して、幕張スタジオと各地の大学を衛星で繋ぎ、セミナーを実施してまいりました。

平成19年10月11日（木）には、「LDとディスレクシア　最前線のNPO活動から見た日本の現状と課題－大学における学習障害へのICTを含む支援に向けて」と題して、NPO EDGEの藤堂栄子会長と事務局の柴田章弘氏を幕張スタジオにお招きしました。お二人とも当事者で、藤堂さんは帰国子女で、ディスレクシアの息子さんを育てた母親でもあります。柴田さんは日本で苦労の末、大学を卒業し、塾の講師を経て現在は支援活動の中核を担っておいでです。

講演では、ディスレクシアの現状と課題、エッジの活動の成り立ちと、当事者の会の活動などについてお話いただきました。さらにディスレクシアへの支援について、小・中・高の教育、大学での対応について、海外の事例とともに説明がありました。ディスレクシアに関して存在は知っているが、実際のところよくわからないと感じていた全国の大学の多くの教職員が当事者であるお二人のお話を聞き、突っ込んだ質疑応答ができたことは、ディスレクシアに対する理解を深める得がたい契機になったと思います。専門家と当事者の双方の視点から、学生が感じる困難、求められる対応や支援方法、具体的な心理状況などを、ご自身の経験を踏まえて語っていただき、心に染み入る素晴らしい講義でした。

現在、この講演はビデオ録画され字幕付のコンテンツとなって以下のサイトからオンデマンド方式で視聴することができます。是非ごらん頂き、ご関心のある方々にお知らせ頂けると幸いです。

http://ship.nime.ac.jp/~disable/

ジョブサポーター実習報告

実習生　柴田章弘

実習期間　2007/11/26～11/30

今回のジョブサポート実習はたいへん有意義な体験をさせていただきました。知的障害の人といいながら、実際私が共に作業をした若い女性はある部分、私自身より優れた面がありました。

例えば、携帯電話を上手に使えますし、一度憶えた場所は間違えないなど、ジョブサポーターが逆にサポートされていたようなものでした。実際、仕事に入ってみると、単純な仕事を黙々とこなしている姿に感銘を受けました。私の役割は「地下鉄の駅への送り迎え」、「清掃する場所の指示」、「お手洗いの確認」「昼食」「日誌書きの手伝い」などを、朝9時から夕方16時の終了まで一緒に実習をすることでした。

付き添うだけではなく、実習生が少しでも作業をしやすいように「声かけ」をしたり、使い捨て雑巾を取り替えたりするのに神経を使いました。無事に5日間実習が終わったとき、実習生、ジョブコーチ、明治学院大学の図書館の方々に心から感謝の気持ちがわいてきました。

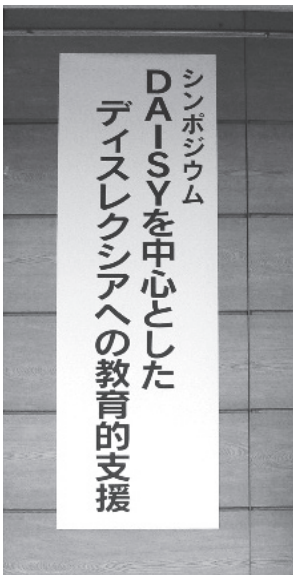
シンポジウム

「DAISYを中心としたディスレクシアへの教育的支援」に参加して

柴田章弘

2008年1月12日のシンポジウムに参加して、支援のあり方を考察しました。DAISY図書は視覚障害者の支援のためばかりか、「読み書き」が苦手な人々にも多いに役立ちます。

講演は充実したものでした。次々に教育関係者、ディスレクシア当事者、ジャーナリスト、NPOなどの関係者が体験談や国内外の支援事例を発表しました。ディスレクシア当事者は本に書いてある字に対面しても、ぼけたり、細かい部分がくっついたり、別のもののように見えます。対応策としては同じ文字でも色や大きさを替えるなど、読みやすくすることです。個人個人の事情に合わせて、設定できるDAISY図書が広がれば、ディスレクシア当事者にすごく支援になることは間違いありません。ところが、日本では著作権やその他の問題もあり、教科書をDAISY化するのにも高い障壁があります。バリアフリー化の社会となるためにも、早くこの障壁が除かれ、DAISY図書が広く一般に広がることを期待しながら、会場を後にしました。



発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノジー

発達障害の子どもたちが普通の学習を続けるのは簡単ではありません。新しいテクノロジーを使えば、彼らの隠された能力を楽に引き出すことができます。「できないこと」や「人と違うこと」があると恥ずかしいという常識を転換させ、21世紀の新しい価値観を持てば、発達障害が障害ではなく、ユニークな個性として受け入れられます。成人の発達障害の方にもあてはまる内容なので、ぜひ一読ください。

著　者：中邑　賢龍
出版社：中央法規出版株式会社
値　段：1,600円＋税

最近の活動紹介

10月27日	明星大学講演【学生200名】
11月16日～27日	ホテルオークラにてソープ絵画展
11月17日	館野さんフォローアップセミナー（11/18に田口研でも講演）
11月23日～25日	横浜・LD学会
12月２日	JDDネット（名古屋）
12月９日	大田区講演（24名参加、保護者、スクールカウンセラー、教育委員会）
１月12日	リハ協、DAISYシンポジウム
１月13日 AM	UD研究所にてLD疑似体験
１月16日～２月29日	LSA養成講座第６期
１月17日	NPOサポートセンターにてNPOに関し講演
２月７日	川崎市高津区　PTA向け講演
２月24日	EDGE総会

今後の予定

３月８日	港区国際交流協会で講演
３月23日	リヴォルブ研究所にて講演
３月27日～29日	BDA（ロンドン）会議
４月２日	LSAフォローアップ講座
４月６日	JDDネット理事会

宮崎紀行

東国原知事でにわかに元気になった宮崎県からお声掛けをいただき3か所で港区の取り組みとLD疑似体験によるワークショップを行ってきました。

まずは宮崎市の教育委員会。70名もの学校関係者に対してお話をする機会をいただきました。司会の方の「これから講演をはじめます。姿勢を正して！」の一言がたいへん新鮮でした。都心の学校ではこのような経験はしたことがなかったので、教師が日本の麗しい「礼」の範を示すことの大切さを感じました。

次の日はエッジの会員でもあるパワフル川越さん（吉野保育園）のお声かけで保育園の関係者の方たちとのワークショップ。親の会の方も来てくださいました。

その次の日はもともと宮崎方面へ行くきっかけとなった日向市における「人権擁護週間」のイベントへ参加。企画をした先生方との情報交換もできました。

痛感するのはそれぞれの地域でそれぞれの事情があっても、どうやって発達障害の人たちへの対応を進めようかと模索を続ける姿です。

教育や福祉と言った行政の枠を超えて、地域の違いを超えて一人一人の児童生徒のニーズに応える具体的な政策と現場へ応援が必要だと感じました。強く印象に残ったのは日南の暖かさと同じくらいの地元の皆さんの温かさと熱い思いです。宮崎の皆様ありがとうございました。ぜひ、夏にでも再訪したいと思います。

文責：藤堂　栄子

愛をはこぶ人キャンペーン

愛をはこぶ人キャンペーンは、昨年より恒例となりました2008年キックオフ懇親会を1月22日に開催しました。12名の方にご参加いただき、今年も順調にスタートを切りました。実行委員長の上野先生を中心に、みなさま活発にお話され、当初の予定を2時間もオーバーするほどの盛り上がりを見せました。昨年にホテルオークラ東京で開催されたマッケンジー・ソープ作品展をお手伝いされた港区LSAのおふたりも新たに参加されました。今年からは毎月1回定例会を持って活発に活動していきます。

今年は秋にソープ氏の来日の実現に向けて準備を進めるほか、学習研究社の新社屋完成披露に伴う企画としてワークショップ、ディスレクシア啓発講演会、子どもたちとソープ氏の絵画展やデイジーのディスレクシアキャンペーンとも協働する予定です。また東京、横浜、九州地域ばかりでなく、その他の地域でも絵画展と、それに連動させた啓発活動や子どもたちとの交流活動を実現できればと考えています。本年もみなさまのご支援とご参加を心よりお待ちしております。

文責：藪　巧一

Report from the EDGE －第16号－
2008年2月25日発行
発行者　NPO法人EDGE
発行責任者　藤堂栄子　東京都港区浜松町1-20-2
村瀬ビル3F
Tel.03-6240-0670・0672　Fax.03-6240-0671
編集　NPO法人EDGE事務局　柴田章弘
印刷　株式会社　信英堂
http://www.npo-edge.jp
http://blog.livedoor.jp/npo_edge/
email:info@npo-edge.jp